

デカセギと家族 (7)

—独立への2つの道・G一家の場合—

稲葉奈々子

樋口 直人

1. 問題の所在

2008年9月に生じたアメリカ発の経済危機は、日本の日系南米人（以下、日系人）コミュニティに破壊的な影響を及ぼした。滋賀県と群馬県大泉町で2009年1～2月におこなわれた緊急調査では、双方とも日系人の失業率は約40%に達しているという¹。一般に雇用調整は年度末にもっとも発生しやすいため、3月には失業率がさらに高まっている可能性が高い。帰国ラッシュで失業が南米側に押し付けられることを差し引いても、未曾有の大量失業が発生している。

かかる事態を生み出した要因については別稿で論じたので繰り返さないが（樋口2009; Higuchi 2009）、非正規雇用への集中が最大の原因であることは間違いない。日系人が1980年代後半からずっと9割以上が非正規雇用に従事してきたことは、この領域では常識といってよい。しかし、そうした事態が持つ問題性、不安定就労がもたらす社会的な影響については、筆者を含むグループ以外誰も問題にしてこなかった（梶田・丹野・樋口2005）。それが、失業の嵐に直面して初めて非正規雇用からの脱出が、問題解決に必要な課題として認知されるに至っている。今は、これまで放置されてきた事態を転換させる好機ともいえるだろう。

だが、何が非正規雇用からの脱出に必要なのか。そして、正規雇用といっても具体的にはどのような職につきうるのか。これまで日系人が集中してきた自動車・電機・食品（コンビニ弁当製造）の三大産業において、正規雇用が今後増加する見込みはあまりないだろう。こうした産業で正規雇用につく経路ができるのは重要だが、それで問題が解決するほど雇用吸収力があるとは考えにくい。それ以外の職に進出する経路について、具体的なイメージを持つことが必要である。本稿の第一の課題は、正規雇用につく具体的なストーリーを描き出すことにある。

さらに、日本に定住した子どもと南米に残る親はどのような関係を結びうるのか。そして老親の生計手段はどのようなものとなるのか。こうした課題に関わる事例紹介はすでに行ってきたが（樋口・稲葉2008b, 2009b）、本稿はその延長線上にも位置づけられる。また、日本では日系人の中の少数派であるアルゼンチン人は、日本で他の国出身の日系人や日本人と結婚する確率が高い（樋口・稲葉2009a）。その経緯や帰結についても、以下ではGという一家の事例報告を通して紹介する。

2. G一家について

(1) 家族の構成

G一家は、父親と母親を中心に図のようになっている。一家の物語は、もともと独身だった父親と母親が、母親の叔父叔母（以下、大叔父、大叔母とする）とパラグアイに移住する際に結婚したところから始まる。母親の父親は戦死し、12歳のときに母親が再婚するまで大叔父の家で世話になっていた。大叔父は日本にいたときには自営業で生計を立てており、従業員も数名雇用していた。中学卒業後、母親は大都市に出て食堂に住み込みで働いていたところ、パラグアイへ移住するという話が持ち上がった²。大叔母は自分の店もあるから移住する必要などないと移住に反対したが、南米には金のなる木があるからと大叔父が決めて1955年に移住した。

その際、大叔父夫婦には2人の子どもがいたがまだ幼く、家族内に労働可能な者が3名いなければ移民できなかったため、母親は同郷の父親と結婚してパラグアイに渡っている³。そのため、母親・父親ともに両親は移民していない。父親には南米に血縁者がおらず、母親の血縁者は大叔父一家だけであった。大叔母とは血縁関係にはないが、50年間苦楽を共にしてきた間柄なので母親は「ねえさん」と親しみをこめて呼んでいる。大叔父夫婦はともに89年にデカセギに行っているが、大叔父は日本で人に使われる生活に慣れず4ヶ月でアルゼンチンに戻り、大叔母は1年8ヶ月付添婦の仕事をして戻った⁴。日本生まれ2人、パラグアイ生まれ2人と4人いる子どものうち3人は日本へのデカセギ経験を持つが、聞き取りしていないため図には入っていない。大叔父は2005年に亡くなっており、大叔母は長女とその息子と同居している。

そして父親・母親ともに日本にデカセギに行き、常時というわけではないが子どもたちも含めて職場も住居も一緒だった。大叔父夫婦のように、夫婦さえ日本での仕事が違って別居していることが珍しくないなかで、デカセギ時にも家族の紐帯がよく保たれていたといえる。そして5人いる子どものうち長男、三男、四男はデカセギに行き、長男と四男は今でも日本に住

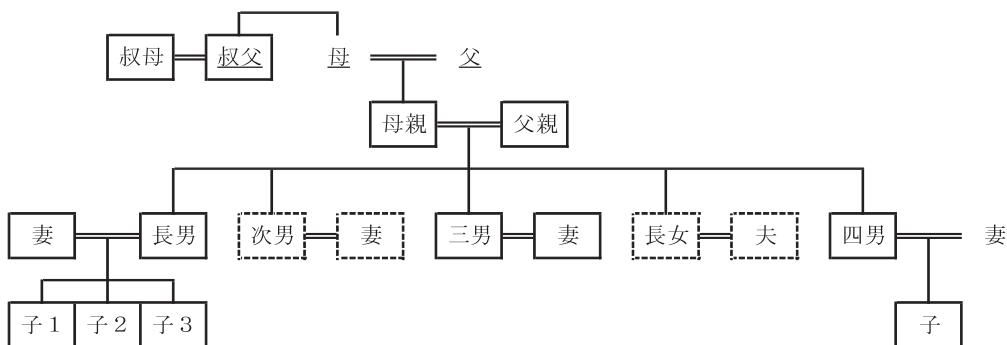


図 G一家の系図（母親からみた孫については、日本に居住している者のみ示してある）

注：実線で囲んだ者はデカセギ経験を持つか、日本居住を示しており、点線で囲まれている者はデカセギしていない。下線は故人を表す。

んでいるが、次男と長女はデカセギ経験がない⁵。三男は日本でブラジル人と結婚し、今はブラジルで修理工場を営んでいる。

一家に対する聞き取りは、まず2006年12月18日にアルゼンチンで母親に対して行った。次に、同年12月20日には母親に紹介してもらい、大叔母にも聞き取りした。さらに、2008年11月24日に長男の家を訪問し、聞き取りの後に次男を紹介してもらい、2009年3月1日に次男の家で次男と妻に会った。

(2) パラグアイ移民後の経験

パラグアイでは50ヘクタールの土地をあてがわれたが、まったくの原生林だったためパラグアイ人を雇って森を伐採し、40日乾燥させてから焼畑にした。そうして開墾した畑も、パラグアイの傷痍軍人のためにと接収され、元の木阿弥になってしまった。母親は、中学卒業後に大阪の繁華街で働いていたのになぜこんなところにいるのか、と思いつつ10年間パラグアイで農業をしていた。その間に長男、次男、三男、長女と4人の子どもを産んだが、当時の日系移住地は医療事情も劣悪で、長男は日本人医師のもとで分娩したが、次男は自力で出産し、三男は夫が取り上げたという。

結局、パラグアイに長くいても将来はない、こんな何もないところにいてもずっと今のままだからと、大叔父と父親がアルゼンチンの状況を見学に行った。大叔父一家は、日本人の花卉栽培農家で仕事を見つけてアルゼンチンに転住した。父親と母親は、大叔父夫婦とは分かれて子ども4人とパラグアイ国境近くでトマトを栽培していた。しかし、霜でトマトが全滅し、生活は一向によくならなかったという。そこで途方に暮れていたら、大叔父が呼び寄せてくれたが、そこでは仕事がないため200キロくらい離れたところにある日系花卉栽培農家で働くようになった。最初は慣れない花卉栽培と痩せた土地によって生活は苦しかったが、開き直って温室ではなく露地で栽培したらうまくいき、それで1970年に初めて冷蔵庫とテレビを購入できたという。

それから大叔父夫婦の近所に引越し、非日系の農家で小作農として働いた。小作ではそれほど収入にならないため、子どもを学校に行かせるためにJICAから奨学金を借りたという。このときは、小作とはいえ花卉栽培も徐々に軌道に乗り始め、この調子で行けば来年には日本に遊びに行けるねと話合っていたところで、1987年7月に竜巻が来て80本あった温室がすべて倒された⁶。そこで途方に暮れていたところで、さらに88年2月に竜巻に見舞われて壊滅的な打撃を受けた。何台か持っていた自動車を売っても、とても建て直すことはできない状況だったという。

3. デカセギから母親のアルゼンチン帰還まで

竜巻で打撃を受けた1988年は、折しもアルゼンチンのデカセギブームの先駆けで、この頃

には旅費を旅行社が立て替えて日本に行くこともできるようになっていた。三男は日本に行きたがっていたし、四男も日本で2年くらい働いて貯金して生活を立て直したほうがいいという意見だった。当初は、この2人が先に日本に行く予定だったが、ビザ申請の際の保証人がおらず、人に頼んで時間をかけるよりは母親が行ったほうがいい、と母親が三男と四男を連れて88年4月に渡日した。農地の整理をしていた長男も89年1月に渡航し、最後にすべて処分した父親が日本に到着した。

こうした経緯があるため、母親と三男・四男は当初は横浜にある大手派遣業者のアパートと一緒に入れられていた。それが三男と四男だけ仕事が見つかって埼玉県鴻巣市の工場に連れていかれ、母親はゴールデンウィークが終るまで仕事がなく、ようやく入間市の工場で働き始めた。だが、三男と四男が働いていた自動車工場では残業がないため、母親が派遣会社の社長に手紙を書いて要請し、1ヵ月半で母親と同じ工場に仕事を変えてもらった。父親と長男も同じ工場ですることができるよう頼んだが、父親は入れても長男の分の空きはなく、長男は単身で埼玉県内の鶴ヶ島の工場で働くことになった。だが、父親は工場で扱うゴムの匂いに慣れず、母親がいったん帰国するのに合わせて派遣会社に頼み、神奈川県愛川町の工場に仕事を変えてもらった。

母親は、工場の仕事に戻るつもりだったが、大叔母と一緒に再渡日したため同じ家政婦紹介所に登録し、付添婦の仕事をして7ヶ月している。付き添いの仕事は、女性の仕事としては圧倒的に収入が良く、母親の日当は2人担当で1万6千円、大叔母は病院での食事代などすべて差し引かれたうえで手元に1ヶ月28万円残ったという。だが、母親は家族と一緒に仕事のほうがいいと、三男と四男ともども夫が働いていた愛川町の工場に合流している⁷。それから3年半、毎年2ヶ月はアルゼンチンに戻って長女のアパートで過ごしていたものの、ずっと愛川町の工場で働き続けた。スペイン語の通訳的な役割もしていたので、時給1000円と他の女性労働者より高かった。

日本では、単に働くだけではなく趣味の日本舞踊を本格的に学んでもいた。踊りの発表会に出るには1回10万円くらいかかるが、乗りかかった船だからと父親も勧めて滞日中に2回出場している。会社の同僚と仕事の後に飲みに行ったり、あちこちに出かけたり、日本での生活は本当に幸せだったと母親は振り返る。実際、アルゼンチンからのデカセギ経験者としては珍しく、母親の帰国後には工場の事務職員がアルゼンチンまで遊びに来たという⁸。

しかし、1993年に父親が工場に働いているときに倒れ、それから身体がどうなるかわからないからと同年9月には夫婦でアルゼンチンに戻った。このとき、夫婦と四男が出し合って市街地に家を購入しており、花卉栽培に戻ることはなかった。それから4ヶ月した94年1月には父親が亡くなり、それ以降はデカセギに行くことはなく母親はその家で一人暮らしを続けている。自宅の他にアパートを一軒デカセギで購入し、その家賃と夫の年金で生活し、子どもたちに小遣い程度をもらって生活している⁹。

4. 四男の独立

四男は、入間市の工場で1年半働いてから半年アルゼンチンに戻り、それから両親と三男と愛川町で一緒に住んで一緒にの工場で1年か1年半くらい働いた。しかし、当時交際していたボリビア人が従兄弟たちのいる群馬で働きたいというので、親元から離れて群馬へと引っ越した。このときは、その従兄弟の紹介で入った工場の時給が安いので3週間でやめ、自分で派遣会社を探して時給1700円で1年半働いた。しかし、93年に時給を1400円に下げるというのでその工場をやめ、溶接の仕事を始めたが、溶接の光を浴びると子どもができなくなるという噂が流れており、実際に周囲の人たちにも子どもがいなかったので4日でやめたという。ただしその時には、工場労働から抜け出そうという志向が四男にはあった。

四男は、小さい頃から両親が家で日本語しか話さないで理解することは可能だが、話すのはほとんどできなかった¹⁰。工場で働いていると、同僚はブラジル人ばかりで日本語が上達しないので、日本人が同僚の仕事につくことを考えていたという。そこで、溶接の仕事をやめてから交際相手の姉のアパートと一緒に世話になり、トラックの運転手になるべく大型免許の講習に通った。運転手ならば周囲には日本人しかいないだろうし、無線を通じて日本語も覚えるだろうと思ったという。しかし、交際相手は運転手の仕事につくには反対で、結局は四男と別れてボリビアに帰っている。

免許をとってからは、教習所で知り合った日本人の父親が営む運送会社で1993年12月から働きはじめ、現在までずっとその会社で運転手をして今では最古参の社員となった。トラック運転手の仕事は、労働時間が長いのが大変だが、無線で話したり、好きな音楽を聴いたり、タバコを吸いながら運転できる。眠ければ好きなときに眠れるので、工場の仕事より気に入っているという。家畜の飼料を運搬しているため、2008年の経済危機の影響もなく仕事はコンスタントにあり、今では年収も500万円以上ある。ただし、賃金は基本的に出来高制で何トン運搬したかによって決まるし、皆勤手当をもらえなくなるため、風邪を引いても仕事を休むことはない。途中でトラックを止めて寝たりして、ゆっくり往復するのだという¹¹。したがって、アルゼンチンに最後に戻ったのは1994年に父親が亡くなったときだけであり、15年間ずっと日本から離れていない。

さらに四男は、日本人女性と交際して1998年に結婚し、子どもが生まれた2001年には帰化申請して日本国籍を取得した。結婚してすぐに一戸建の家も購入し、妻の両親と同居している。ローンもあと5年ですべて返し終わるといふ。

長男はトラックの通り道から遠くないところに住んでいるため、今でも時々待ち合わせて会うなど付き合いはあるが、日本にいる従兄弟たち(大叔母の子どもたち)とは連絡をとっていない。アルゼンチンにいたときの知り合いとも3人くらいは連絡をとったことがあるが、今は日本人としか交際していない。運転中には、無線で同業者同士が知り合うことが多く、親しく付き合っているのは皆そうした友人だといふ。妻は介護の仕事をしており、妻の同僚と自分の同僚を家に招き、手製の焼き豚を振舞って合コンを設定するようなこともしている。

5. 長男の独立

長男は、鶴ヶ島の工場で1年間1人暮らししながら働いていた。日本に行くのは人生でのチャンスの1つだと思い、最初は朝7時から夜7時までの労働だったのを、慣れてからは志願してさらに3時間別のラインで働き、月収は50万円に達した。しかし、自動車のスポンジ製造だから軽くて楽な仕事だと思っていたが、合成ゴムの加工は80～100度くらいのものを扱わねばならず熱いし、素材からガスが出て仕事帰りに自動車が2つにみえたりしたという。

そうしたこともあり、また時給が100円高かったこともあり、両親がいる愛川町の工場に移っている。ここでも稼ぐために朝6時から夜8時まで働いていたが、日本人の派遣会社社長に誘われてさらに千葉県佐倉市の工場に移った。長男は日本語の読み書きこそ仮名しかできない程度の実力だが、会話には不自由しなかったため勧誘されたという。ただし、一緒に仕事して利益を折半にするという約束で5、6年働いたが、単に使われている状態で割に合わなかったという。

そこで、1998年には自分で独立して派遣会社を作ることにして、知り合いの不動産業者に司法書士や税理士を紹介してもらい、有限会社を立ち上げた。最初は派遣先がなかったものの、長男が元々働いていた工場に数名の労働者を入れるところから始まり、その工場が程なくして倒産してからは、親会社に派遣できるようになった。調査時点では3社に35人を派遣しているが、28名が働く一番の派遣先で長男もフォークリフトの運転をしている。

長男は、渡日時にはアルゼンチンで結婚しており、子どもも3人いた。妻子を残してデカセギに出たわけだが、日本にいる間にペルー人女性と懇ろになってアルゼンチンの妻子とは離婚し、ペルー人女性（現在の妻）と結婚した。それから2002年まで、アルゼンチンの子どもに毎月1000ドルずつ養育費を払い続けていた。アルゼンチンで所有していた家は慰謝料として渡し、今でも前妻と子どもたちが住んでいる¹²。仕送りは合計で1500万円くらいになるため、日本でなかなか家も買えなかった。ただし、養育費を払っていたから人に使われていたのでは貯金ができない、だからこそ独立して必死に働いたのだという。

養育費を払う期間が終わってから、当初2200万円だったが売れ残って1870万円になっていた一戸建を購入し、妻と3人の子どもと一緒に住んでいる。もう50歳を過ぎているし、まだ小さい子どもの世話にはなりたくないし、老後のために年金も遡及して加入し、小さな家を3軒購入して賃貸にだしている。将来的にはあと2軒くらい買い足せば月に20万円くらいの家賃収入になるし、年金と合わせて生活していけるだろう。もうアルゼンチンに戻ることはありえないと長男は言い切り、日本での老後を前提とした生活設計をしている。

社会関係の面では、四男とは異なり日本人との付き合いは仕事ではあっても、頼れるような関係の人はいない。アルゼンチンからの友人との付き合いもなく、四日市にいる従兄弟とも十数年のうちに数回電話で話した程度で、母親に電話して初めて消息を知るくらい情報過疎の状

態にある。その代わりに、同じ住宅地には5軒くらいペルー人が住んでおり、妻の親戚も10人くらい近所にいるため、その15人くらいで毎月3万円出して頼母子講をしているという。その意味で、長男の社会関係の窓は妻にほぼ限定されており、アルゼンチン人ではなくペルー人コミュニティに組み込まれている。

6. 結びに代えて

長男と四男は、ともに派遣労働から脱出して安定した経済基盤を築くことができた。母親は、アルゼンチンに戻ってから仕送りをもらっているわけではないものの、3回子どもたちに招かれて日本に行き、帰るときにはある程度の生活費になるような小遣いをもらっている¹³。自宅と年金と賃貸アパートで生活ができて趣味も追求できるうえに、日本に遊びにも来られるという意味で、長男は母親のことを幸せな生活をしていると思うと述べていた。共に妻子がいて家も購入しているながら母親を招くことができるのは、通常のデカセギ者より収入が多いことによる。長男は、日本行きというチャンスにしがみついて何とかうまく成功できた、養育費があったからがむしゃらに働いたというが、実際に「しがみつく」ことができる者は多くない。毎月2、3万円程度の貯金では10年たっても300万円しか貯まらない、そしてほとんどの人はこうした状態にある。さらに、デカセギ仕事では前に進めないと長男が指摘する通りであるが、そこから脱け出るのは容易なことではない。

長男がとった派遣労働→派遣会社設立という上昇ルートは、デカセギでの成功をもたらすもっとも典型的なもののひとつである。派遣会社は、派遣先さえあれば自宅でもできるため、長男のように有限会社にするまでもなくいわばヤミで小規模の派遣を営むデカセギ者は多い。また、デカセギで成功する者のほとんどは派遣会社の社長ないし元社長だし、その利益を製造業や他のビジネスに投資して業態転換を図ることが多いという点で、成功への最短ルートといえるだろう。ただし、これは同じ南米からのデカセギ者を「商品」とすることが前提となるため、あくまでも「目端の効く」一部の者のニッチでしかなく、日系人コミュニティ全体の上昇ルートにはなりえない。

それに対して、四男が選択したトラック運転手になる例は、南米からのデカセギ者のなかでは珍しい。我々がこれまでアルゼンチンからのデカセギで聞き取りしてきた約400名のうち、トラック運転手の仕事をしていたのは四男ともう1人別の二世だけだった。運転手にしても被雇用者であることに変わりはないが、通常の工場労働の1.5倍程度の収入を四男は得ている。その意味で、単に日本語を話せるようにするという当初の動機とは別に、社員となって生活基盤を安定させるという意味でも転職は成功だった¹⁴。多くのデカセギ労働は、工場で長く働いてもよほど目立つ働きをする者でない限り、正社員への登用はなされない。読み書きは十分でなくても、運転技術が意味を持つトラック運転手という仕事は、移民にとっての参入障壁が低い部類に入る¹⁵。このような非正規就労からの脱出路を、出来る限り多様な形で見出し、デカ

セギ仕事以外の労働市場に入り込んでいくことが、日系人労働者全体の課題となるだろう。

そして興味深いことに、長男と四男では社会関係において対照的ともいっていいくらいの相違がある。もともと日本語の会話には不自由していなかった長男は、結果的には妻の親族や近隣のペルー人に親密圏がほぼ限定されている。自らが営む派遣会社の従業員とは、立場上付き合い合えないようにしているとはいえ、日本人との交際があるわけでもない。これは、派遣会社がデカセギ労働の延長としてあり、デカセギ者内部での閉ざされた関係を生み出す傾向をつよく持つことによる。それに対して当初は日本語を話せなかった四男は、運転手になってからデカセギの人との付き合いはまったくなく、妻も日本人である。同僚の他に同業者たるトラック運転手と無線で知り合い交際し、妻の同僚である介護労働者たちとも交流するようになっていく。デカセギ者が地域で交流しようとしないうというステレオタイプは、社会一般でも学会でも根強く蔓延しているが、長男と四男の例が物語るのは社会関係を形成する構造的な位置づけの重要性である。日本社会のなかで移住労働者がどのように組み込まれ、そこからどのような変化がありうるのか。日系人コミュニティの壊滅的な状況が誰の目にも明らかな今だからこそ、これまでのステレオタイプを転換する好機だともいえるだろう。

注

- 1 『東京新聞』2009年2月26日。「経済危機に伴う外国人住民の雇用・生活状況調査結果（速報）」滋賀県国際協会、2009年1月。
- 2 当初はブラジル移民を考えていたが、新しい移住地がパラグアイにあるからと、パラグアイ移住を決めている。ブラジルに移住していれば、アルゼンチンに転住することはなかっただろう。
- 3 つまり移民に際して必要だから結婚したのであり、恋愛結婚だったわけではない（当時は恋愛結婚の比率も半数程度だったため、特に例外的だったわけではないが）。
- 4 大叔母の家は、父親・母親の家のような天災の被害にあったわけではないので、必ずしもデカセギに行く必要はなかった。それでも日本に行ったのは、30年以上日本を離れて日本を見たかったこと、創価学会を信仰しているので大石寺に参拝したかったことによる。実際、大叔父は日本の旅館で働くが、仕事になじめず4ヶ月で帰りの航空券代が貯まった時点でアルゼンチンに戻っている。大叔母は、休日の少ない付き合いの仕事の合間にも2回郷里に戻っている。本当はもっと長く日本で働きたかったというが、夫が戻ってこなければ離婚するというのでアルゼンチンに帰ったという。その際にも、友人2人と連れ立って大石寺に行ったほか、佐渡島など日本各地を1ヶ月旅行したという。このような「トランスナショナルリズムの実践としてのデカセギ」という性格は、特に2年以内でアルゼンチンに戻る場合に顕著であり、この点については稿を改めて論じたい。
- 5 工業中学（日本の高校相当だが、普通科よりも1年就業年数が長い）を卒業した三男は、82年に県費研修で日本の自動車工場で実習を受けており、そのときに日本をとて気に入ってそのまま残っていいと思ったという。次男は、結婚後ブエノスアイレス近郊に引っ越してそこで花卉栽培を行っていたため、他の家族のような天災にみまわれていない。また、日本が嫌いで行きたいという気持ちもないため、生活に余裕はあるが渡日経験はないという。長女は外科医であり、学生時代に県費研修で日本の医学部に10ヶ月留学しているが、一家のデカセギ時にも大学に通っていたため日本に行っていない。
- 6 花卉栽培農家にとって最大の脅威は、竜巻と雹である。日本で雹が降ることはそれほど多くないが、アルゼンチンではしばしばあり、ピンポン玉くらいのものが降ることもある。特に建設費用が高かったガラスの温室だった時代には、雹で屋根が壊れたときの被害は非常に大きい。雹と竜巻の違いは、

後者が進行経路に沿ってものが吹き飛ばされるという、きわめて局地的な被害を及ぼす点である。自分の家では温室がすべて吹き飛ばされたが、隣家ではまったく影響がなかったということも珍しくない。

- 7 これは、その工場の社長に家族を連れてきてほしいと父親が頼まれたからできたことである。こうして家族全員が合流するに際して、元の大手派遣業者をやめて工場内の派遣業者と契約を切り替えて仕事をしている。
- 8 アルゼンチンからのデカセギ者に限らず、南米からデカセギに出て工場働く者は、ほとんどの場合日本人とは隔離されたラインで働き、日本人との付き合いは少ない。バングラデシュ人やイラン人の場合、インタビューでしばしば日本人の同僚や経営者の名前が言及されるが、日系人の場合それとは対照的にデカセギ内部で閉ざされた社会関係を生きている。その意味で、日本人の同僚がアルゼンチンまで遊びに来るような関係を築くのは珍しいが、通訳として媒介していたことと母親の積極的な性格によるものだろう。
- 9 アルゼンチンでは、花卉栽培も含めて自営業の場合、夫しか年金をかけていないことが多い。ただし、夫の死後も妻が夫の年金をもらい続けられるため、寡婦が無年金になることはない。
- 10 花卉栽培農家の二世は、市街地に住む二世より日本語能力が圧倒的に高い。だがG一家の場合、日系人が集住するコロニアで育ったわけではなく、日本語教育を受ける機会もなかった。それゆえ、日本語に自信がなかったものと思われる。長男は、パラグアイ生まれであり日系人の集住地である年齢までは育ったため、日本語の会話には不自由しなかった。
- 11 もちろん、トラック運転手にはさまざまなリスクがあり、楽な仕事ではない。四男は、就職以来ずっと夜8時に出勤して朝に帰る生活を続けている。また、初めて行った慣れない場所で路面が凍結しているときに、後続車が突っ込んできて死亡する事故があり、裁判にもなって執行猶予3年の有罪判決になったほか、裁判費用が150万円かかったという。四男の妻は、元の際相手がトラック運転手に反対していた理由がよくわかった、単にやくざな商売だということではなく、事故のリスクも考えねばならなかったのだ、と語っていた。
- 12 子ども1人が成人後にデカセギで日本に来たが、日本に馴染めずすぐに帰ってしまったという。
- 13 日本に来たときにも、単に子どもの家にいるだけでなく、1ヶ月くらい日本全国を旅してまわっている。その意味で、往復の交通費に留まらない負担を子どもたちもしていることになる。
- 14 もちろん、トラック運転手はいわゆる3K職業の代表であり、定着率も低い仕事の一つではあるが、工場労働より安定性や収入という点では上だといっただろう。
- 15 北米やオーストラリアではタクシー運転手に移民が多いことからすれば、日本でも運転を主な業務とする仕事に移民が参入する余地はある。実際、梁石日の『タクシードライバー狂騒曲』が象徴的に示すように、在日コリアンのタクシー運転手は多いといわれる。

文献

- 樋口 直人, 2009, 「日系人の大量失業——『もうひとつの派遣切り』の教訓」『DEAR News』138号。
 ——・稲葉 奈々子, 2008a, 「デカセギと家族(1)——日本就労の意図せざる結果・A家の場合」『徳島大学社会科学研究所』21号。
 ——, 2008b, 「デカセギと家族(3)——完全な定住と事実上の定住の間・C家の場合」『茨城大学地域総合研究所年報』41号。
 ——, 2009a, 「デカセギと家族(4)——日本で育った子どもが帰ってから・D一家の場合」『徳島大学社会科学研究所』22号。
 ——, 2009b, 「デカセギと家族(5)——一家離散と再結合の過程・E一家の場合」『茨城大学地域総合研究所年報』42号。
 ——, 2009c, 「アルゼンチンからデカセギ研究・序説——デカセギの概要と仮説提示の試み」『茨

城大学地域総合研究所年報』42号.

Higuchi, Naoto, 2009, "Mass Unemployment of Japanese Latin Americans as a Disaster Made by Humans: The Consequence of Labour Market Flexibilisation under the Economic Crisis in Japan," Paper presented at the COMPAS Annual Conference 2009: New Times? Economic Crisis, Geo-political Transformation and the Emergent Migration Order, Oxford University, September 21-22, 2009.

稲葉 奈々子・樋口 直人, 2008, 「デカセギと家族(2)——農園維持の世帯戦略・B 家の場合」『茨城大学人文学部紀要(社会科学科論集)』46号.

——, 2009, 「デカセギと家族(6)——ミドルクラスのハビトゥスと周辺の労働力という現実の間・F 一家の場合」『人文コミュニケーション学科論集』4号.

梶田 孝道・丹野 清人・樋口 直人, 2005, 『顔の見えない定住化——日系ブラジル人と国家・市場・移民ネットワーク』名古屋大学出版会.

(付記) 本稿のもととなった調査のうち、海外調査は科学研究費に、国内調査は全労済委託研究によっている。インタビュー時には心温まるもてなしをいただいた G 一家の皆さんの厚情と併せて、記して感謝したい。